

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：21502

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380910

研究課題名(和文) 人生を物語るための心理的装置としての故郷 - 故郷喪失からのアプローチ -

研究課題名(英文) The psychological functions and meanings of "hometown" through the cases in half psychological homeless people.

研究代表者

沼山 博 (NUMAYAMA, HIROSHI)

山形県立米沢栄養大学・公立大学の部局等・教授

研究者番号：00285678

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は半ば故郷喪失したと考えられる人々の故郷認識を調査することにより、人生や語りにおける故郷の働きを把握しようとしたものである。調査対象はハンセン病回復者と東日本大震災避難者である。ハンセン病回復者への聞き取り調査により、故郷に対する認識として、原風景、自らのルーツ、心の働き、帰る対象、世代継承の5側面が見出された。これに基づいて尺度構成を行い、東日本大震災で帰る場所を失い、県を越えて避難した人々を対象にインターネット調査を行い、その反応傾向を分析した。

研究成果の概要(英文)：This study intended to investigate the psychological functions and meanings of "hometown" through the cases in the sufferers of Hansen's Disease and of the Great East Japan Earthquake. We think them half psychological homeless people. First, we conducted a hearing investigation with the HD sufferers and extracted five aspects of the functions and meanings of "hometown" from interview records: "original image ('genfukei' in Japanese)", "roots", "psychological functions", "going back", and "connection to ancestors". Second, we conducted an online survey with the earthquake sufferers. The measures consisted of the above five aspects, and the response patterns were analyzed.

研究分野：生涯発達心理学

キーワード：教育系心理学 生涯発達心理学 故郷 心理的装置 ハンセン病回復者 東日本大震災

1. 研究開始当初の背景

これまで私たちは、ハンセン病回復者の語りを通して、彼らの生涯発達を検討を行ってきた。回復者は、国の強制隔離政策により、故郷から離れた療養所での生活を強いられた人々である。療養所入所者の大半は第2次世界大戦前後に入所しているが、当時は厳しい外出制限があり、そのため帰郷は非常にまれなことであった。親の訪問や手紙によるやりとりはあったというものの、親の死後やきょうだいの婚姻後はこれらもなくなり、在郷家族と絶縁状態に陥る人が続出した。彼らにとって「故郷」は自由に帰れない場所になったのである。この状況は、強制隔離政策の廃止(1996)や国家賠償訴訟の判決(2001)以後もほとんど解消されることなく、現在に至っている。ハンセン病問題は未解決といわれるゆえんの一つであるが、実際入所者のなかには60年以上帰郷したことがない人が今でも数多く存在している。

では、このような入所者にとって「故郷」は心理的にどのように位置づけされているのであろうか。これまでの調査によると、彼らの人生に関する語りのなかで「故郷」に関するものは全体の半数近くを占めており、内容も細部にわたっていることが示されている。入所者の大半は10歳代前半で離郷しており、故郷で過ごしたのは時間だけでいえば人生の約7分の1に過ぎないが、「故郷」を失ったからこそ、心のなかでその重みが増したものと考えられた。

入所者以外にも、例えば先の東日本大震災では、今もなお多くの被災者が避難生活を余儀なくされているが、報道で避難者のインタビューを聞くと、大半が「故郷」をキーワードとして語っている。自由に帰れなくなってはじめてわかる「故郷」の意味や働きが存在がここでもうかがえる。

一般に成人期以降の人間が、自らの生活や人生を振り返って語ろうとするときに、「故郷」を話題としない人はほとんどいない。これに、上で述べた「自由に故郷に帰れなくなった」人々の場合も合わせてみると、「故郷」は人生を物語るための、何らかの心理的装置(枠組み)となっていることが推測される。そして、それを基盤にしながらか、その後の人生を紡ぎ合わせ、人は人生の物語を構築しているのではないかと考えられたのである。その意味で、成人期以降における語りや生涯発達を理解していく上で、「故郷」は欠かせない概念であるように思われた。

「故郷」の働きに関しては、古くは哲学者ハイデッカーが「ヒューマニズムについて」(1947)において取り上げている。彼は“故郷喪失(Heimatlos)”について論じるなかで、人間の文化や言語などの意味体系は、生活の場である「故郷」にそもそも土着するものであり、その土地で織りなされた歴史が反映されたものと捉えている。そして、そのうえで人間を「歴史のなかに生きる存在」と位置づけ

ているが、この観点は、生涯発達心理学における文脈主義の視座とも重なっており、この点でも「故郷」をとりあげる意義は非常に大きいと考えられた。

しかしながら、こうした「故郷」の心理的な働きは、「故郷」にずっと住み続けている、もしくは自由に帰れる、という人間を対象としたのでは把握しにくいものと思われる。そこで、かつてハイデッカーが“故郷喪失(Heimatlos)”を論じるなかで「故郷」を捉えようとしたのになぞらえ、故郷に自由に帰れず、半ば故郷喪失した人々の「故郷」の位置づけや内容を捉えることで、逆説的に「故郷」の心理的意味や機能を明らかにすることが可能になるのではないかと考えられたのである。

2. 研究の目的

1. を踏まえ本研究は、次の3点を具体的な目的とする。

(1) まず既に収集してあるハンセン病療養所回復者の人生に関する語りを再分析し、彼らが心に秘めてきた「故郷」の構成やその性質などを明らかにする。そのうえで「故郷」と療養所での生活をどのような意味づけで繋いでいるのか、また「故郷」が彼らの人生や語りの中でどのような意味を持ち、働きをしているか考察する。また、この2点を明確化するため、今までと同じ対象者に聞き取り調査を行う。

(2) 東日本大震災避難者を対象に質問紙調査を行い、自由に故郷に戻れなくなることで人生のどのような点が変わるか、また戻れなくなって初めて分かった故郷の意味などについて問うことで、「故郷」と現在の避難生活をどのような意味づけで繋いでいるのか、また「故郷」が彼らの人生や語りの中でどのような意味を持ち、働きをしているかを考察する。

(3) (1)(2)を相互に関連づけながら、人生や語りにおける「故郷」の心理的意味や機能を検討する。

3. 研究の方法

(1) ハンセン病回復者に対する聞き取り調査について

ハンセン病回復者8名に対する聞き取り調査を行った。そのうち、国立ハンセン病療養所入所者は2名、退所者は4名、台湾の楽生療養院2名である。年齢は70歳代後半から80歳代である。分析等に当たっては、これまでに聞き取り調査を行った逝去者3名も含める。

(2) 東日本大震災避難者に対する質問紙調査について

全国に22万人いる東日本大震災避難者のうち、岩手県・宮城県・福島県の被災者で、震災後2012年までの間に、県を越えて避難をしている人58名を、「半ば故郷を喪失した人」とみなし、彼らを対象とした、インター

ネットによる質問紙調査を実施した。

質問紙の主な内容は、避難状況、故郷の現在の状況、故郷についての認識や意味づけを問うものである。

質問紙、特に上記については、(1)のハンセン病回復者に対する聞き取り調査の結果を基盤として、次の21項目を構成した。これらは概念的に5つの側面から成る。なお、今回は故郷に対する肯定的な認識や意味づけに限っている。

<原風景としての意味づけ>

- ・原風景のある場所である
- ・思い出のある場所である
- ・愛着のある場所である
- ・懐かしい風景(記憶)のある場所である
- ・なつかしいにおいのする場所である
- ・よく見知っている場所である

<自分のルーツとしての意味づけ>

- ・自分にとって原点となる場所である
- ・自分らしさのルーツとなる場所である
- ・自分自身の一部である
- ・自分の人生を語る上で欠かせない場所である

<心の働きに関する認識>

- ・活力の源となる場所である
- ・それがあから頼ることができる場所である
- ・そこにいだけで心の休まる・安心できる場所である
- ・心の拠りどころとなる場所である
- ・思い出すと心が温くなる場所である
- ・思い出すとほっとする場所である
- ・困ったときに頼りたくなる場所である

<世代継承としての意味づけ>

- ・先祖から受け継いだものがある場所である
- ・地域の伝統や文化のある場所である

<帰る対象としての意味づけ>

- ・いずれ帰る(帰りたい)場所である
- ・いずれ錦を飾る場所である

なお、比較対象のため、岩手県・宮城県・福島県から他県へ、通常の転勤や異動等によって移った人23名にも同様の調査を実施した。

(3)「故郷」の心理的意味や機能

(1)(2)の結果をふまえながら、人生を物語るための「故郷」の心理的意味や機能について考察する。

4. 研究成果

(1)ハンセン病回復者に対する聞き取り調査について

今回の聞き取り調査に加えて、これまでの記録を整理し、「故郷」という視点から再分析を行った。ここでは、特に在郷家族との関係から考察してみたい。

聞き取り調査に協力してくださった回復者は太平洋戦争前後の、無らい県運動に代表される最も隔離が厳しかったところに療養所

に入所している。

そのとき彼らは児童期もしくは青年期であったこともあり、在郷家族との関係があった人が多い。しかし、それは主として親による面会や手紙を中心とした一方的なものであった。実家へ帰省もした人もいたようであるが、周囲の人々の知られないようであった。

しかし、この関係は、入所者の場合は、その後親の逝去や、きょうだいの結婚問題をきっかけとして変化する。すなわち、断絶状態に至る場合と、面会や手紙(後には電話)を中心とした一方的なものが細々ながら続いた場合とがあるようである。いずれの場合も、実家への帰省やお墓参りはできない場合がほとんどである。出身県が企画する里帰り事業に参加しても、実家近くになると隠れ、バスのカーテン越しに実家を眺めるくらいしかできなかったという。

そしてこの違いは1996年の予防法廃止や2001年の国賠訴訟判決まで続くが、その後の関係性の変化とも関連があることが示唆されている。断絶状態があった場合は、面会や電話を中心につき合いの再開に留まる一方で、細々ながらつき合いが続いていた場合は、実名使用や冠婚葬祭への出席など、一族内での認知へとつながっていくような関係へと変化していったようである。もっとも「実態調査」の結果を踏まえると、後者の例はそれほど多くないと言わざるを得ない。また、沼山らのその後の調査によると、前者では、面会や電話以上の展開を見せている例は、少なくとも調査対象者の中にはなく、関係性の調整が膠着状態に陥っていることが推測される。

高齢化が進んだ近年になると、帰省した場合であっても、故郷の街が変わりすぎていること、また在郷家族も代替わりが進んでいることもあって、故郷や「イエ」の意味合いに変化が生じてきている。

なお、比較対照のため、台湾の入所者2名についても聞き取り調査を行ったが、話をうかがっている限り、日本の回復者よりも帰郷し、在郷家族とのかわりがあったものと考えられる。

また、退所者の場合は、在郷家族のなかに理解者がいれば、退所後も交流を維持していることが少なくないが、在郷家族に拒絶された場合は絶縁状態に陥ることが多いようである。予防法廃止や国賠訴訟判決後においては、前者では交流が拡大して、冠婚葬祭に呼ばれるなど、在郷家族のなかでの認知へとつながるようなところでまで変化することもあったが、後者ではほとんどが絶縁状態のままである。前者でも、近年理解者(きょうだいなど)の家族の死去により交流が途絶える状況が出てきてくる。

なお、これまでの聞き取り調査を基盤として、人生や語りにおける故郷の意味や働きをまとめ、故郷認識に関する質問項目を作成し

た。(3. 研究の方法(2)を参照)
 (2)東日本大震災避難者に対する質問紙調査について

調査対象者の属性について

今回の調査協力者は男性36名、女性23名、平均年齢は44.1歳であった。避難場所は北海道、東京都、大阪府、秋田、山形、茨城、栃木、群馬、神奈川、長野、新潟、愛知、兵庫の各県であった。

故郷に対する認識について

先述した故郷に対する認識5側面について、それぞれ項目得点を合計し、避難者・転勤者の別・性別による2要因分散分析を行った。なお、上記5側面それぞれを構成する項目間の係数は0.8~0.9台であった。分析の結果、5側面いずれについても避難者と転勤者の間には有意差はみられず、性別については世代継承以外の4側面において有意差がみられた(細かい統計値は省略する)。なお、交互作用には有意差はみられなかった。図1は各側面の得点を1項目あたり(7点満点)に変換してグラフ化したものである。

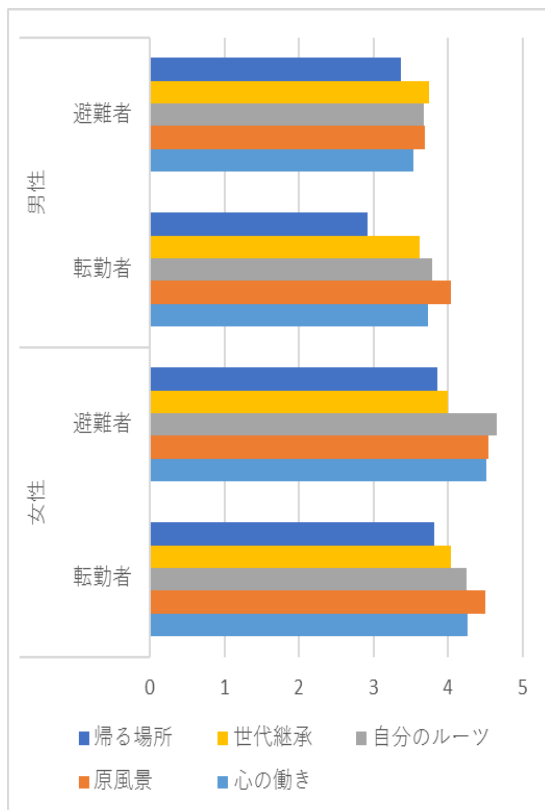


図1 避難者と転勤者の故郷認識

5側面は故郷の肯定的な働きについてのものであり、今回の結果は、概して男性よりも女性のほうが故郷の意味や働きを肯定的に認識していること、避難者と転勤者とでは認識にそれほど違いがないことを示している。

故郷に対する認識と帰郷頻度との関係について

故郷に対する認識の5側面から帰郷頻度

への影響関係を調べるために、避難者の回答のみについて、共分散構造分析を行った。5側面の概念的な関係性を踏まえ、原風景、自分のルーツ、世代継承それぞれが心の働き、帰る場所を媒介して、帰省頻度に影響を与えるというモデルを構築した。分析にはAMOS22.0を使用した。モデルの適合度を算出したところ、 $\chi^2(36) = 57.550, p < .05, GFI = .990, AGFI = .930, CFI = 1.000, RMSEA = .000$ であり、このモデルの適合度は十分に高いと判断された。この結果を図2に示した。

図2によると、まず心の働きから帰省頻度へのパスが $-.32, p < .05$ であり、帰る場所から帰省頻度へのパスが $.52^{**}, p < .001$ であった。また、心の働きから帰る対象へのパスが $.91^{***}, p < .001$ であった。

心の働きへのパスは、原風景からが $.34^{**}, p < .001$ であり、自らのルーツからが $.60^{***}, p < .001$ であった。また、帰る場所へのパスは、世代継承からが $.26^{*}, p < .05$ 、原風景からが $-.76^{***}, p < .001$ 、自らのルーツからが $.38^{+}, p < .10$ であった。

この結果は、心の働きとしての認識は、原風景や自らのルーツという故郷の意味づけに影響され、帰る場所としての意味づけは原風景、自らのルーツだけではなく、世代継承という意味づけにも影響されていることを示している。原風景、自らのルーツ、世代継承といった3つの意味づけは、帰省頻度には直接的に影響はしておらず、心の働きや帰る対象としての意味づけを媒介して、間接的に影響しているということである。

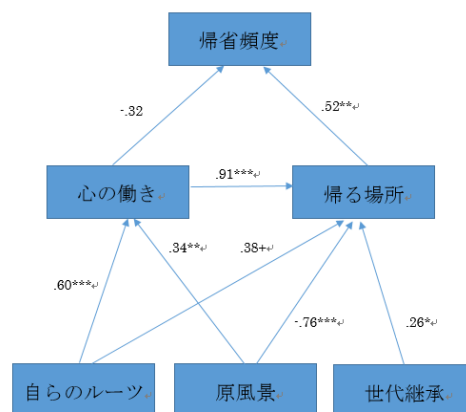


図2 故郷認識と帰郷頻度の関係

また、帰る対象としての意味づけは帰省頻度に直接的に影響しているが、心の働きとしての認識は帰省頻度に直接的に影響しているだけではなく、帰る対象を媒介した間接的な影響もある。このように、今回故郷認識として取り上げた5つの側面は、帰省頻度への影響関係という点でいえば、原風景、自らのルーツ、世代継承といった3つの意味づけが基盤にあって、それらが心の働きや帰る対象としての意味づけに影響し、最終的にこれら

2つが帰省頻度に影響を与えるという構造があることがわかる。

これらの関係性のなかで注目されるのは、心の働きとしての認識から帰省頻度への負の関係性と、原風景の意味づけから帰る場所としての意味づけへの負の関係性である。前者は、帰る場所としての意味づけを媒介しての間接的な影響も考慮すると、心の働きの認識は、帰る場所としての意味づけをあわせて持っていることで、帰省頻度が高まるが、心の働き単独ではかえって帰省頻度が低くなってしまふということである。心の働きとは故郷を思い起こすことで心が安定するという認識であるが、こうしたアタッチメント的な認識があれば、帰郷の頻度は低くなるということがうかがえる。後者は、原風景の意味づけが強いと帰る場所としての意味づけが弱まるということであり、震災による被害で原風景が壊されてしまったことが影響しているのかもしれない。もちろんこの結果は震災避難者に対するものであり、これが彼らに特有なものであるとするには、一般的な人々に対する調査を待たなくてはならない。

(3) 「故郷」の心理的意味や機能について

今回質問紙調査で取り上げた「故郷」についての5側面は、いずれも故郷の意味づけや働きを肯定的に捉えた場合のものである。しかし、そればかりとはいえない。

ハンセン病回復者の場合は、在郷家族内や地域で差別的な対応をされた経験を持っている人の場合は、語りが肯定的なものばかりではなく、否定的な内容も帯びる。多くは、発病する前は両親ともきょうだいとも、友人をはじめとする地域の人々とも良好な関係を築き、よい思い出を持っており、それだけに故郷に対するアンビバレントさ(両価性)が増大している。彼らが受けた差別的な経験は児童期もしくは青年期におけるものであるが、その影響が70歳~80歳代になってもなお残っている点に注目すべきであろう。

また、東日本大震災避難者も同様の事態を抱えている人々が少なくない。今回の調査の予備として、避難者に対する聞き取り調査を行ったが、その際に、避難をめぐる在郷家族や地域の人々との間で軋轢があり、避難に対する批判もあったとのことであった。最終的に避難を決断しても、家族や地域における人間関係を考えるとなかなか実行に移せなかった、避難を終了して戻ろうと思っても、元の関係には戻れないかもしれないといった不安がある、など、家族や地域が個人の行動のしがらみになっていることがうかがえる。このような場合は、故郷に対する語りの中に否定的な内容が入り混じる。

これらの点を考慮すると、「故郷」を思い起こすことは、心の働きや意味づけとして、快経験をもたらすものばかりではなく、不快経験につながる可能性を持ちうることが示唆される。

今後は「故郷」の持つ否定的な意味や心理的な機能も含めて、研究を進めていく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

沼山博・福島朋子・菊池武烈, 「ハンセン病療養施設入所者における在郷家族との関係性の推移に関する研究」, 査読無、米沢女子短期大学『生活文化研究所報告』, 41巻, pp.13-19, 2014年

〔学会発表〕(計2件)

Hiroshi Numayama・Tomoko Fukushima, "A Study of Life-Course in the Elder Taiwanese Generation with Japanese-Style Education", 28th International Congress of Applied Psychology, 2014年

Hiroshi Numayama・Tomoko Fukushima, "Meanings of Hometown in Psychological Homeless People", 31st International Congress of Psychology, 2016年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

沼山 博 (NUMAYAMA, Hiroshi)

山形県立米沢栄養大学・健康栄養学部
・教授

研究者番号: 00285678

(2) 連携研究者

福島 朋子 (FUKUSHIMA, Tomoko)

岩手県立大学・社会福祉学部・准教授
研究者番号: 10285678

菊池 武烈 (KIKUCHI, Takekatsu)

東北大学名誉教授

研究者番号: 17530468